

嵐の後に

「ところでよ。お前んとこの明夫のことだけど、いったい今何してんだい。見たところ仕事もしてないみたいだけど、心配でなあ。」

「ああ、困ったもんよ。わしも女房もあいつのことには、頭を悩ましているよ。まったく何を考えてるのか……清さんとこの勇太は、日に日にたくましくなっていくっていうのによ。」

「まあまあ、そう言うなって。なあ、明夫を俺の船に乗せてみんか。勇太とは、同級生だしよ。あいつも助かるだろうから。俺らの若い頃みたいによ。」

「そうは言ったって、清さんに迷惑掛けるのが目に見えとるしな。」

「何、水臭いこと言ってるんだ、ガキの頃からの俺と信さんの仲じゃないかよ。」

親父たちのそばで漁具の手入れをしながら、黙って聞いていた俺は、親父のお節介がまた始まったと思いつつも、内心嬉しかった。

同じ水産高校で学んだ親父たちは、卒業と同時に同じ遠洋漁船に乗っていた。若かった頃の二人は、何ヶ月も家に戻れない厳しい漁場で互いに励まし支え合い、同じ釜の飯を食って一人前になったと聞いている。これまでの人生は、互いの存在なくしては語れないほどの仲だ。家庭を築いたのも息子を授かったのも、偶然、同じ年だった。それが、俺と明夫だ。

俺たちが高校生になった数年前、漁業の景気が悪化し始めたのをきっかけに、親父たちは遠洋漁船を下りた。それまでに貯めた金を頭金にして、親父は、小型船を手に入れ、今は、せがれの俺と近海で操業している。明夫の親父の信さんは、漁師料理を売りにした居酒屋を営み、店で使う鮮魚の仕入れに、毎朝、こうし

て魚市場に顔を出す。親父たちは、今だにどんな些細なことも毎日のように語り合い相談し合っている。

明夫と俺は、親父たちと同じ水産高校の同級生だった。俺たちも子どもの頃からいつも一緒にいたし、何でも話し合える仲だった。だが、確か開店した居酒屋が忙しくなってきた頃からだったように記憶している。あの頃、時々遊びに行くと、明夫はいつも一人で飯を食っていた。そして、いつの頃からか、明夫は、俺を避けるようになり、派手な仲間と付き合うようになっていた。いつも大勢に囲まれ楽しそうにしている明夫が羨ましかった。置いてきぼりにされたような気分になっていた。明夫と時々顔を合わせながらも、とりとめのない話をするばかりで、それをとがめることもできないまま、今まで来てしまっていた。

その夜、夕飯を済ませた俺は、親父の了解を得てから不安を抱えながらも明夫に会いに行った。

明夫は、突然の俺の訪問に驚いた様子だったが、以前のように自分の部屋に入れてくれた。ひとしきり同級生の話題で盛り上がった後、俺は、意を決して投げかけた。

「なあ、明夫、これから何か仕事の当てでもあるのか。」

「別に……。」

明夫の表情がこわばれるのが見て取れた。俺は、なるべく明るい声で言った。

「だったらよ、うちの親父が、船に乗らんかってよ。実は、俺一人じゃきつくてよ。明夫が、手伝ってくれと親父も俺も助かるんだ。」

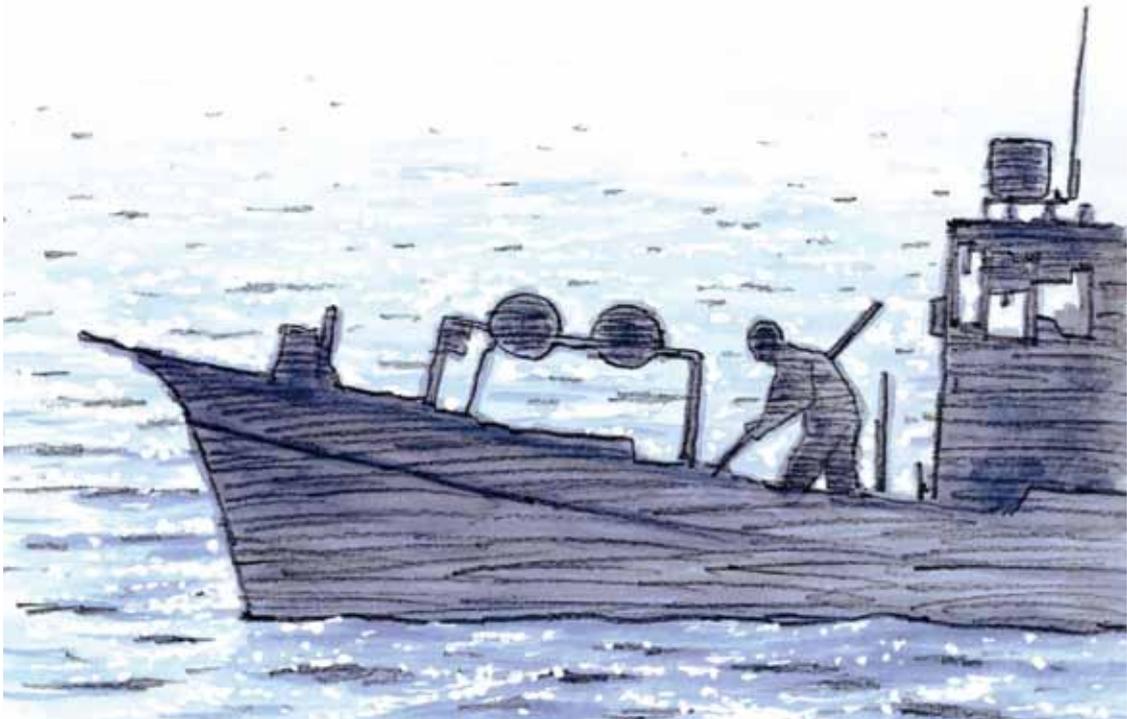
「ああ……考えとく。」

明夫は、ぶつきらぼうな声で答えた。

水産高校を卒業したものの明夫は、就職する先が決まらず悩んでいた。だからといって親父の仕事を継ぐという選択肢は、持ち合わせてはいなかった。同級生が仕事を決めていく中、焦りながらも、しばらくは市内のコンビニやレストランで働いていた。だが、接客という仕事が性に合わないのか、あろうことか客や店

主とけんかになって、どこも長くは続かなかった。深夜まで遊んだり、おふくろさんに金をせびったり、安定しないふらふらした生活を続けていたのだった。

俺が訪ねて数日してから、明夫が漁師見習いになることを決意したことを親父から聞いた。早速、その夜から三人での出漁が始まった。しかし、期待していた通りとうまくはいかなかった。明夫が、少しでも怠けると即座に親父の罵声ばが飛んだ。怒鳴られる度に、明夫は、船べりのあちこちに拳を打ち付け、海に飛び込んでやるなど無謀な怒りを声にした。黙々と慣れた手つきで仕事をしている俺をいまいまましそうな表情で見ている明夫と目が合うこともあった。明夫の働きぶりは、総じて感心できるものではなかった。親父の姿が見えないところでは特にひどかった。俺は、最初は慣れないせいもあるからと思っていたが、操業用の道具の荒っぽい扱いや、雑な甲板掃除かんばんで汚れを残したままでも平気である明夫の態度が気になってきていた。明らかに俺の前では、やる気の無さを見せつけていた。俺はそれを分かっているが、何も、面と向かうと何も言えなくなってしまう、仕方なくその後始末を請け負っていた。



ある日、そんな二人のぎくしゃくした関係に気付いていた親父が、俺に向かって言った。

「勇太、お前、明夫のことを本当に思っているなら、遠慮せずに思ったことを言ってみてやれ。仕事も一から丁寧に教えてやれ。上っ面だけで付き合ってるんじゃないぞ。明夫がこの先どうなってもいいのか。お前からそれでもガキの頃からの付き合いなのか。」

親父は、俺の心の内を見抜いていた。親父の言葉が、胸に刺さった。ずっしりと重い固まりを胸に抱えたまま、出漁の時間が迫ってきていた。弓なりの月がぼんやりと辺りを照らしている穏やかな晩だった。明け方から北西の風が強まるという予報が出ていたものの漁場がそう遠くないこともあって、経験豊富な親父の決断に従った。

出港してから二時間足らずで、水深百メートルほどの漁場に着いた。海風が頬を突き刺す。ずっしりと重い網を引き上げる指先が、悲鳴をあげていた。ブリッジにぶつかる波が飛沫を上げ、時折、突風が駆け抜け始めた。夜明けともいえず立ちこめた真っ黒な雲の固まりから、突然、激しく雨が降り出した。やがて波のうねりは、ブリッジを越える高さにまで達し、船体は縦横無尽に揺れた。波が高いと、胃の縁が引つ張られ血液が逆流するような気分になる。明夫にとっては、初めての時化だ。暴風に逆らいながら網を引き上げようとしているが、体が思うように動かないようだ。明夫のおぼつかない足さばきは、今にも大きな波のうねりの中に引きずり込まれそうだった。俺は、危険の大きさと一瞬の恐怖に戦慄が走った。俺は、思わず明夫の腕を掴んだ。

「明夫、何しとるつ。全身に力を入れろつ。」

俺の渾身の叫び声が、激しい雨音と共に明夫を我に返らせたようだった。

「ぐずぐずするなつ、波に飲み込まれるぞ。後は俺がやる、ブリッジに入れつ。」

明夫は、声を荒げる俺の指示に従った。網の引き上げを終えた俺は、ずぶ濡れになって中に入った。明夫

は、暴風雨のさなか、狭いブリッジの壁に身体のあちこちをぶつけながら何度も吐いていた。俺は、その度に、明夫の背中をさすった。

「す、すまん。かつこ悪いな、俺。」

「何、謝ってるんだ。波に飲み込まれなくてほんと良かった。初めての嵐の時は、誰でもこうなんよ。俺なんか、もっと悲惨よ。」

「勇太、お前が羨ましかつたんよ。俺らは、ずっと一緒やったやろ……。」

俺にとっては、意外な言葉だった。俺は、これまで明夫の心境を考えてみようとしなかった。明夫の表面だけを見て、それ以外の何も見ようとはしてこなかった自分が悔やまれた。今、まっすぐに明夫と向き合わなければならぬ。そう思うと、俺は、驚くくらいに素直な気持ちになれた。

「明夫、今までどこで何やとつたんよ。待とつたんぞ。」

「分かつつたよ……、だから、戻ってきた、ここに。」

蒼白な顔の明夫が苦笑いをしながら言った。

やがて、風雨は弱まり船の揺れは次第に小さくなっていった。操舵室そうだから親父の野太い声が上がった。

「おー、引き上げるぞ。エンジン全開。明夫、大丈夫か。みんなお前とおんなじだ。俺もお前の親父もな。お前らも、いっちよ前になる通り道を通らんな。」

そう言うと、親父は、大声で笑った。俺たちは顔を見合せて、がっちりと手を握り合った。

西の空の棚雲の切れ間のあちらこちらから、光が波間に降りてきていた。

